研究テーマ：全学共通教育科目「地域の理解」を対象とし、全学集約型エフォートを介した全学的教育改善への取組	
研究代表者（職氏名）：　教授　　友定賢治	所属：保健福祉学部ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ障害学科
共同研究者（職氏名）：教授　藤井保　講師　小川仁士　　助手　木本尚美	

１．問題の所在

「地域の理解」は、全学共通教育の複合科目で、広島をキーワードに、３キャンパスの教員が、それぞれの専門分野から講義するものである。　2005 年度は、広島・庄原両キャンパスで開講され、300 名を超える受講生があったが，それが問題のはじまりにもなった。大講義室での遠隔講義で、多人数の受講生という授業環境は、けっして望ましい状況ではない。私語・居眠り・遅刻などなどの受講態度に関する問題が全部顕在化し、一方では、教員の「授業力」が試されることにもなった。さらに、授業終了後に、総合教育センターが実施した授業評価で、問題がさらに顕在化した。この課題への取組と結果を示しておきたい。

２．方法

○授業内容、講義方法等の改善への取組

①受講生は、全学部・全学科であり、まったく専門分野の異なる受講生がいることに配慮する。

②概説的な説明にならず、問題を明確にした授業をする。

③プレゼンテーションの向上

- パワーポイント資料で、学生に配布するものには空欄を設けて、書き込みをさせる。
- 授業の途中で質問を出し記入させる。
- スクリーンになるべく教員のすがたを映す。

○学生の受講態度の改善

①私語・居眠りに対しては、授業担当者が厳正に対処する。

②遅刻については、状況に応じて対処法を変えていく。

③レポート提出回数を減らし、時間をかけて書けるようにする。

○３キャンパス担当者、授業担当者、総合教育センター間の意識統一

各キャンパス担当教員が、毎時間、授業の様子を担当主任(友定)に知らせ、それによって、次週以降の授業改善に結び付けた。

○全学的な取り組み

①授業を、なるべく多くの方に担当してもらった。

②授業公開し、ＦＤの一環としての意味合いをもたせた。

３．結果と課題

このような取組の結果、授業終了後に実施した、学生の授業評価は、2005 年度に比較して向上した。

第１に，受講者は複合科目，「地域の理解」がねらいとしている広島県の特性や課題に興味関心を持ち，積極的に取り組む態度がうかがえた。

第２に，ほとんどの担当者は１回限りであったためシラバスは厳守され，熱意を持って授業にのぞんでいた。そのため，履修した学生は授業から知的刺激を受け，得るところが多かったと認識していた。

第３に，対面授業が可能であったキャンパスの方が，遠隔で受講したキャンパスよりも授業方法（教員の声，視聴覚機材の使用，資料の提示など）の点において高い評価を得た。またこの点の評価は，授業満足度や後輩にもすすめたいと感じる評価結果と高い相関があった。

第４に，受講生は提出したレポートに対する教員のコメントや評価，フィードバックを期待していることが明らかにされた。